

<司会>

只今より、慶應義塾創立150年記念速水融名誉教授講義を開催いたします。本日は、慶應義塾三田キャンパスにお越しいただき、誠に有難うございます。御蔭様で慶應義塾は2008年に創立150年を迎えることとなります。これもひとえにたくさんの方のご支援、ご愛顧の賜物であると、心より感謝申し上げる次第です。

本日の講義は、創立150年を記念いたしまして、「復活！慶應義塾の名講義」と題して、長く慶應義塾においてご教鞭をとっていただきました先生に、改めて感謝いたし、その意を表すために、慶應義塾のキャンパスにお戻りいただきご講義を行っていただくというものでございます。また、先生にご指導いただいた、たくさんのご卒業生、関係者の皆様にはご卒業後も発展を続けている慶應義塾の姿をご覧いただくとともに、懐かしい恩師の講義を受講していただくことで、改めて学問の素晴らしさを感じ取っていただくという企画でございます。本日は、ゼミ、経済学部以外の方にも広くご案内させていただいておりますが、先ほどご説明いたしましたご趣旨による講義となりますので、若干卒業生向けの内容となるかもしれませんが、ご了承のほど、よろしくお願いいたします。また、今後の広報のため、講義風景をカメラ撮影させていただきます。その中で一部、ご出席者の皆様のお顔が入る可能性がございます。予めご了承ください。

さて、本日の講義でございますが、「苦しかった講義、楽しかった講義～歴史人口学・勤勉革命・経済社会～」というテーマで慶應義塾大学経済部の速水融名誉教授にご講義いただきます。教室の入口でお配りいたしました封筒の中に本日の資料が入っておりますので、ご覧ください。それでは速水先生、よろしくお願いいたします。

<速水名誉教授講義：「苦しかった講義、楽しかった講義、歴史人口学、勤勉革命、経済社会」>

皆様、こんにちは。今日の講義と申しますか、お話ですが、実は私、依頼を受けたときに、「苦しかった講義、楽しかった講義」という題で話したいということをお申しましたところ、もう少し講義らしい題をつけてくれという注文が付きまして、「歴史人口学、勤勉革命、経済社会」という私のよく使った用語が、頭に浮か

んだものですから、慌てて副題としてつけたわけです。今日は特にこれらについて堅苦しい講義をするとわけではありません。むしろ、私のたどってきた、研究者としての道が、講義にどのように反映されたのか、あるいはされなかったのか、ということをお話していきたいと思います。試験もなく、レポート提出もございませんので、皆さんはどうか気楽にここ一時間半を過ごしていただきたいと思います。

とって、漫談にならないように努めますけれども、あっちに脱線したり、こっちに脱線したりしながら進めていくことを予めご了承願いたいと思います。

さて、私の履歴は、お配りした資料に示しておきましたように、昭和4年に東京で生まれまして、ずっと東京で育ち、空襲最中も東京で過ごし、慶應義塾には昭和20年という、敗戦の年に旧制の予科に入学いたしました。で、慶應義塾は東京にある諸大学の中で、戦災が最も激しくひどかった大学でございます。もちろん、三田の校舎は全部焼け落ち、それから、焼け残った日吉の校舎は、進駐軍に接收され、といった状態でありまして、校舎もあちこちを借りて講義はバラバラ行われる始末でした。おまけに東京の大部分が焼き払われていましたので、私自身、居る所がないのですね。あっちへ転がり込み、あっちへ転がり込み、何回か布団と最小限の荷物だけもって、満員電車で引っ越して、転々したことを覚えております。

そういうわけで、実は、一年目はほとんど授業もなかったのですが、私自身授業に、出ることも出来ませんでした。ですから当然そこで、落第といいますか、今の言葉では留年になると思ってまいりましたところ、丁度、丁度という具合が悪いんですが、予科の学生全体がストライキをやりまして、試験をボイコットしたんですね。ですから、学校側とすればやむを得ず全員を進級させた。ですから、私は、運良く二年になったわけです。私は当然、そこで留年するだろう、場合によってはもう、慶應をやめて、他の学校を受け、一からやり直す覚悟でいたのですけれども、留年にならなくて進級したものですから、節操なくそのまま居座りまして、学業を続けるということになったわけでありまして。ようやく復旧してきたのが、三年目ぐらいでしょうか。図書館が復旧し、本が読めるようになるとか、この三田の校舎も接收が終わって授業が始まるとか、中にはその後の私の進路を決めることになった高村象平先生の経済史の講義が始まるとか、というよう

なことがありまして、やっと学園生活に入ったわけであります。

昭和23年から、私は学部に進みました。今は教養課程と専門課程とっていますが、旧制のときは予科3年と学部3年のはずです。ところが、私の在学してました学年は、本来ならば昭和26年の3月に卒業するわけです。ところが昭和26年3月というのが新制の第1回の卒業と重なる。これでは就職が大変だろうという学校側の親心といいますか、とにかく半年卒業が早まりまして、昭和25年の9月という中途半端な時に卒業になりました。履歴に昭和25年9月に経済学部卒業とありますのは、留年して9月になったわけではなくて、大学の制度としてこの9月卒だったのです。ですから、昭和25年度卒には、3月卒と9月卒の2回があるのです。

私自身、在学しているときから、自分はどうも我侗ですし、あまり人の言うことを聞かない。私の父親も学問をやってましたし、研究、学問の世界に進もう、果たして自分にその能力があるかどうかということは別であります。とにかくそう思っていました。で、最初に勤めましたところが、資料に書いておきましたように、昭和25年10月から28年3月まで、日本常民文化研究所です。この研究所は渋沢敬三という日銀総裁もやられた方ー渋沢栄一という大変著名な明治期の実業家がおられますけれども、そのお孫さんーが、作られた、社会史あるいは経済史、民俗学の研究機関で、ここから近い三田綱町に研究所があったのです。その研究所が水産庁委託を受け、月島の水産研究所の一角を借りて、日本全国の漁村の資料調査をやっていたのです。

私は学部時代に特殊講義として置かれていた漁業史という科目を履修していました。担当されていたのが、羽原勇吉（はばらゆうきち）先生。この方は、当時の水産講習所、今の水産大学、今また名前が変わったようですが、そこを定年退職されてから塾の専任講師として来られ、講義をもたれた方です。今でも思い出しますけれども、羽原先生は懐中時計を悠々と机の上に置かれて、講義をされました。ある年に、「皆さんがもし漁村の出身で休みの時なんかはそこへ帰ったら、そこで史料調査をしてみてください。強制ではありませんが」、と言われ、私、実は母親が紀州熊野の出でして、休みにはよく熊野へ行っていました。卒業の前の年だったか、そこではなかったのですけれども、隣村に参りまして、何か史料はありますか、と問うたところ、郷蔵をあけて、この中にありますよとみせ



て戴きました。そこに古い長持ちがあって、その蓋を開けますと、いっぱい史料が詰まっている。その一番上に、慶長6年紀伊国室郡何々村検地帳というのが載っていたのですね。慶長6年(1601)というと関が原の戦いの翌年のわけです。思わず、今流の表現をすると、鳥肌が立ちました。つまりこんなに古い史料がこんな身近にあるのかということです。

私は学部的时候は西洋経済史、イギリスの重商主義をテーマとして論文を書いています、卒論もそれでありました。現在は西洋経済史、外国経済史をやる方は、印刷された研究文献だけでなく、少なくとも史料を使いますね。当時はもちろんそんなわけにはいかない。ですから、発表された論文や本に依らざるを得なかったわけなのですが、やはり何となく隔靴搔痒といたしますかね、の感があったのです。歴史の研究はこういうものかな、と疑問になってくる。ところがそういう一次資料を目にすると、やはりこういうものを使った研究こそ歴史の研究ではないのだろうか、もちろん、文献研究は大事なのですが、一次資料を使った研究にそれからあこがれるようになりまして。それで丁度羽原先生の紹介で常民文化研究所との関係が出来てきますと、もう矢も盾もたまらず、月島にある分室でアルバイトをすることになりました。

卒業後も、所員としてそのままそこに居座ってしまったのです。ラッキーだったのは、そこで机を並べて一緒に仕事をした中に、皆さんもお名前はお存知と思いますが、網野善彦君がいましたし、全員古文書が読めるわけですね。それから常民文化研究所の所員であった大先輩の宮本常一さんが居て、一緒に地方の調査に行くという幸運にも恵まれました。能登半島を一緒に歩いたものです。

そういうわけで私はその常民文化にいる間に、庶民、つまりその時代に生きていた一般の人々の暮らし、生き様というか、そういうことを知ることがいかに大事かということを知らされたわけでありました。ところがこの研究所が昭和28年、朝鮮戦争が終わり、特需がなくなり時の政府は財政引き締め政策に転じます。それに伴って補助金打ち切りということになり、そういう漁村の資料調査にお金が出なくなりました。今日流に言えば、リストラに遭いまして、全員解雇になったわけですね。網野君は都立北園高校の先生になっていきました。それでも職のすぐ見つかった方はラッキーだったのです。私は慶應義塾大学経済学部助手の募集を知り、応募いたしました。ところが助手とはいえ、それが無給なんですね、

給料なし。まがりなりにもそれまで給料を貰っていたから、無給のところへ移ったときにはかなり苦しかったことは事実です。親の家にいましたから、住居費は払わなくてよかったのですが、やはり自由になるお金がなくなるというのは寂しいものですね。ですが、とにかく助手の試験を受けました。そういうわけですから、受ける人も少ない。二人とるところに三人だったと思います。次の年を含めると、結局三人とも助手に合格しました。平野絢子さんと庭田範秋さんと私です。

とにかくそれで無給の副手を2年やりまして、2年経ったところで、給料が出るようになりました。数千円だったと記憶しています。ところが助手になって給与をもらうとなると、講義を負担することになります。最初は「英書講読」という科目です。一年経ってからでしたかね。ですから昭和31年あたりから講義を持ったことになります。しかし、この科目は私には大変苦しかった。まずテキストを自分で選ぶことは出来ません。それに私たちの使うテキストはもちろん経済学のテキストです。経済史という学問分野は経済学におかれてはいますけれども、当時では経済史は必ずしも経済学の知識がなくても何とかやっていた時代です。ですから経済学の勉強もしなきゃならない。そういうわけでテキストを自分で選べるようにしてくれないかなどと言って担当の先生にひどく叱られたこともあります。ですがとにかく「英書講読」というのは助手が全員持つのだというわけで数年もちました。今日おそらくここに、その時代の私に「英書講読」を習ったという方がいらしたら、多分授業料を返せとおっしゃるかもしれない。我ながら苦しく、不出来な授業であったと思います。それが最初の講義ですね。

それから昭和34年に助教授になりました。当時の慣習ですと、助手を6年務めれば助教授という一種の、階梯制みたいなものがありまして、28年に入りましたから6年たって助教授というわけですね。助教授になると特殊科目として一つ、それから専門科目を一つ持たなければならない。それから研究会(ゼミ)ですね。私はそのまさに「漁業史」という科目、これは羽原先生が勇退されました跡を継いだわけです。それから「一般経済史」、これは日吉の第二学年に置かれていました。これをもとと。それから「研究会」も開けと。ということになったわけです。

この「漁業史」なんですけれども、確かに私はこの漁村資料の調査とか漁村のことを調査してきました。史料整理もやりましたし、羽原先生の講義も聞いてき

ましたけれども、さて自分で一年間漁業史の講義ができるかということになりますと、やはりこれができるいんですね。初め半年はなんとかやりましたけれども、タネが尽きてしまい、陸（おか）へ上がってしまいました。つまり「漁業史」という講義名ですが、「農業史」になってしまったわけです。農業には江戸時代当時、魚の干したもの、つまり干鰯とか干鰯とかを大量に使うから漁業が大事なんだという屁理屈で、無理矢理陸に上がって「漁業史」の講義をした覚えがあります。ですからこれまた及第点とは到底言えない。大学の教師というのは、教壇に立って講義をしているとき、学生諸君からみると何の苦労もなくやっているようにお思いかもしれないけれども、実はそうではありません。とにかく準備が大変です。講義ノート作りに一週間のほとんどを使ってしまっって講義をする。すぐまた次をやらないと間に合わない。教室で今日はもう時間がないからやめると言っって時計を見るとまだ20分余っているようなことがよくありました。

「漁業史」はまだよかったのです。自己採点すればこれはどうみてもCですね。C以上の点はつけられませんが。もっと困ったのが「一般経済史」。一般経済史というのは、極端に言えば古代から現代までの人類の経験してきた経済の歴史というかを講義する、場所と時代を問わないでやるわけですから、極端に言えば万卷の書を読んで、しかも自分の枠組みを作ってきちんとやるというのが理想的な「一般経済史」です。ですから今でもそう思っっていますけれども、「一般経済史」のような講義は新米がやるべきでなない。これは大家というか、もうある程度完成した人がやるべきであるというように考えます。しかし、とにかくやれということになり、皆助教授クラスはやっている以上、拒否できないわけです。このノート作り、これに七転八倒しました。後で申しますけれども、自分で経済史に対する、枠組みのようなものができてくれば、これはその枠組みにのっっってやればいいのですけれども、そういうものが何もないという時期ですと、どうしても既存のもの、既存の枠組みとか、他人の書いたものによって講義をするという、甚だ不本意なものになってしまいます。おまけに片方には「漁業史」もあったわけですね。ですから、「一般経済史」を最初にもった昭和34年とか35年ごろ、私の講義を聞いた方はこの場で授業料、返して下さいと言われたら、返さなきゃならないとさえ思っっています。今から考えれば、もう顔が赤くなるような講義ではなかったらうかと思っいます。しかも「一般経済史」は必修科目でしたので、全員が聞く



わけですからね。

後になって自分なりの枠組みができてきますと、これは楽しい講義になってきます。苦しい講義から楽しいになりました。内容的にも、これは自己満足度でいえば、CからAに変わりましたけれども、初めのうちは本当に苦しかった。

ところがそういう状態のところへさらに問題が起こりました。それは35年、つまり助教授の2年目早々の35年6月22日に、私の先生でもあり、それまで「日本経済史」を担当されていた野村兼太郎先生が急逝されました。心臓のご病気で書齋で亡くなられましたので、学者としては、非常に名誉のある亡くなり方であったわけですが、今から考えるとまだ63歳というお若さですから、もっと長く活躍され、指導していただきたかった先生です。大変怖い先生で有名でして、私も褒められたのはたった1回だけで、後は叱られてばかりいまして、怒ることがないと言って怒られた方もいると聞きます。その先生が急逝されて、その持たれていた「日本経済史」をお前やれというわけですね。さあこれは大変です。もちろん何の準備ない。もう「一般経済史」と「漁業史」でふうふう言っているのに更に「日本経済史」やれと。おまけに野村先生のゼミもですね。あとでお話しますが、ゼミもその前の年から速水ゼミというのを開講していました。それからその次の年、野村先生がもたれていたゼミ、これを持ってというわけです。ゼミ二つ。しかもこれを一緒にやれないのです。二つのゼミの時間が重なっていないので、一緒の時間にしたら学生諸君の履修が、狂ってしまいます。ゼミというのは、決して学生が報告していればよいというわけではありません。

ゼミのことはともかく、「日本経済史」、これは後に私は「日本経済史」をずっと担当することになったのですが、さあどうやっていっていいか。これも大変やはり私のことを困らせたわけです。1960年代に太閤検地論争というのがありまして、太閤検地、土地の調査をめぐる論争が華々しく展開されました。それに首を突っ込みまして、論文も幾つか書いたものがあります。実は学位論文も近世初期の検地に関する研究です。これは未だ本にしていらないのですね。私の教え子達には、博士論文を書いたらそれを本にしろと言っているのですが、自分の書いた博士論文は本にまだしてない。してないのに本を出せて言っているので、内心忸怩たるものがあるわけで、目下準備中ということにしておきます。とにかく検地なら何時間か稼げるというわけで、太閤検地について何時間か講じ、とにかく夏

休みまでもたせて、夏休みの間に秋以降の「日本経済史」の講義の準備をし、当時私たちが共同研究をしていた近世関東農村の研究結果と繋げなんとかその年はのりきったわけです。

「一般経済史」も「日本経済史」もそうですけれども、やはり自分の枠組みがないとどうしても既存の枠組みに頼る。あるいは既に出版されている本からとってくる、論文をつぎはぎして講義ノートを作るとか、そういうことになってしまう。これは褒められたことではないわけですね。

そういうわけで、私は昭和35年、36年、37年あたりは絶不調というか、不調のどん底でありました。つまり太閤検地はとにかくやった。次に何をやっていいかもわからない。なのに講義の準備は毎日しなければならないという状態、悪循環に陥りまして、これといった業績も出せないまま過ごしてしまったことを思い出します。ですからこの時期は最も講義の苦しかった時代でありまして、その時代に私の講義を聞いた方がいらっしゃるとすれば、この場を借りてお詫びしたいと思いますが、事情はそういうわけであります。

さて、そういう私にも実は大きな転換がやってまいります。それは何だったかと申しますと、慶應義塾には教員を海外へ留学させるという制度がもう開校以来ございます。戦前でありまして、二年とか三年、海外留学をさせて、海外の学問を吸収してくる。そして日本へ帰ってくれば講義をさせるという制度がありました。ところがこれが戦争が始まってから途絶えてしまいます。行こうにも行けなくなる。戦後になってもしばらくは行けない。ようやくそれが回復しまして、私の教わった先生方、例えば農業経済学の小池先生とか、日本経済論の伊東先生、世界経済論の山本先生たちが、海外留学にでかけられます。ところが、そういった先生が一年、二年海外に出かけられましても、若輩の私に回ってくるのは、ずっと先のことになってしまいます。そこで、私の学部時代の先生であった、高村象平先生が塾長のときに、福澤基金という基金を作られます。財界からお金を集めて基金を作ってその運用益によって、35歳以下の若手を海外に送るという新しい留学制度が始まりました。これはもちろん現在でも続いていまして、何人かの方が福澤基金による海外留学を経験されているわけであります。

私は幸い昭和38年に第二回の福澤基金による留学生として海外留学の機会を与えられました。慶應義塾の海外留学の制度というのは非常に有難いことに、ど

こへ行ってもいい、何をやってもいいという制度で、まさか何もやらなくてもいいというわけではなかったのですが、とにかく私は、自分は日本経済史をやっている。海外へ行くのに正当な理由が見つくようなところはないかということを考え、日本とポルトガルとの関係をやろうと思い立ちました。実は日本とポルトガルは、ある時代には世界の貿易史上大変重要な関係をもっている。日本はたくさんの銀を産出してしまっていて、ポルトガル人の手によってそれが輸出され、大部分は中国に入っていくわけですね。そういう研究をしたいものだと思って、留学先をポルトガルにしたわけです。ポルトガルは物価も当時、西ヨーロッパの中で一番安だし、与えられた留学費用で十分食えるだろうと思いましたが、日本人もいないだろう、多少遊んでいてもバレることはないだろうという下心もありました。事実ありませんでしたけれども、とにかくポルトガルにしたわけです。

さらに、ポルトガルへ行くのに、まっすぐリスボンに行ってしまったのじゃつまらないから、日本経済史をやっている者が、当時の状況として度々海外へ出る機会はないだろうし、途中、寄れるだけ寄ってみよう。当時、あれは誰でしたかね、「見るだけ見てやろう」ですか、そんなような題の本が出ていましたけれども、そういう気持ちで、特にイスラム社会というのを、この目でみたいという気持ちを強くもっておりました。なぜかというと、西洋のことは、いろんな本にたくさん出てくる。もちろんそれは本で出てくるわけであって、実際そこに住めばまた別でありましょうけれども、イスラムのことはもっと分からないのです。ですから、当時は羽田でしたけれども、羽田から飛び立って、最初テヘランに降ります。イランで数日、ついでイラクに数日、シリアに数日、レバノンに数日、エジプトに数日というように航空券を買って、それからギリシャへ寄り、ヨーロッパへ入っていくことにしたのです。

最初着いたテヘランでは、イランはまだ王政の時代ですね、革命の起こる前ですから、パーレビ王朝の時代だったのですけれども、行くのには二つの目的がありました。一つはペルセポリスという昔のペルシャの都を訪ねる、実際には、そこは瓦礫の山だったのですけれども、そこを訪れてペルシャの都の跡をこの目でみたい、これは歴史をやる者としては許される理由だと思います。第二の理由は、あんまり許されない。何かというと、カスピ海、裏海とも書きますが、塩辛いのがどうしても信じられなかった。これを試すためカスピ海の水を舐めたかったん



ですね。この二つが目的でテヘランに降り立ちました。こんなことをしたからと言って、福澤基金を返せということは言われなことを私は信じております。慶應義塾は寛容であるというふうに信じておりますけれども、とにかく行ったわけですね。まあ色々な経験をしました。たとえば、このカスピ海へ行く途中ですが、テヘランで泊まったホテルのボーイ長が、自分はカスピ海沿岸の出身で、そこへ帰るからお前、連れてってやるっていうわけですね。彼の乗った大きなアメ車というんですか、に乗って、彼の家に行きました。着いて、これがワイフであると女性を紹介するわけですね。彼は戦時中、イギリス軍のドライバーをやっていたというので、英語が通ずるわけです。ところが、すぐ別のところへ連れ行く。あれっと思ったら、これ、自分のワイフ。ご承知のように、イスラム社会は複数の妻をもてる、しかし、平等に取り扱わなければならない。一人だけ紹介してもう一人紹介しないのはいけないんですね。ですから、私にこっちを紹介したらあっちの奥さんにも紹介しなきゃいけない。紹介する方はそれは当たり前のことだと思ってやってるのですが、される方はやはり、カルチャーショックですよ、これは。そういうことは生まれて初めてで、なるほどこれはやっぱり来てよかったというように思いました。

カスピ海のレイク・テイストを終わって、テヘランへ帰ってきて、ペルセポリスも訪れ、さあ、今度はバグダッド。ところがバグダッドで革命が起こったんですね。バース党、この間までいたフセインの党ですね。それが天下を取ったために、折角東京でとったビザは無効になったわけです。私は渋谷にありましたイラクの公使館で、チグリス・ユーフラテス川のほとりにたって歴史を考えるとというのは、歴史をやっている私にとって夢であると言って、ビザをもらっているのですがそれが無効になってしまいました。イラクへは、はるかの後で私のゼミを出たそこに居る卒業生が行って、仕事を十分やってきていますから、私の行かなかった分をつぐなって余りあるものだと思いますけれども、とにかくイラクだけは行き損なってしまいました。ですから地図の上で、行った国を塗っていきますとイラクだけ空白になっています。

そこでその次はシリアですから、ダマスカスということになりますけれども、テヘランからダマスカスへ行く直行便がない。ですから一旦ベイルートへ行かなきゃならない。レバノンですね。ちょうど現在このところイスラエルとの間で戦

争状態になったので、あの炎上したベイルートの空港に降り立つことになったわけです。ベイルートから幾つかの史跡を通過してシリアとの国境へ来て、そしてそこからダマスカスへ入ったのですが、公共の交通機関はなかったので軍のジープが連れてってやるというわけで乗せてもらって行きました。やっぱり若いからできたのですね。今だったら到底できないと思いますが。ダマスカスへ入ってモスクとか市（いち）とか色々あります。それらを見て、アレッポという北の方にある古い町へ行きます。そして町を歩いていたら、一団の青年達と会って、それがその中学の先生なんですね。お前どこから来たのかというから、日本だと言ったら日本人は初めてだ、是非一緒に来てしゃべろうっていうわけですね。一緒に何時間かしゃべった。こういうのも楽しい思い出です。

アレッポからまたベイルートへ戻るのですが、これは実は鉄道で戻ることになりました。というのは、私は実は鉄道ファンなのですけれども、クックの国際列車時刻表にアレッポからベイルートへの列車の時刻が書いてあって、それが一等、二等、三等、という三等級ある列車です。で、しかもそれはバグダッドからイスタンブール、厳密に言えばイスタンブールの対岸のウシュクダラというところなんですけれども、ウシュクダラ行国際列車と連絡している列車なんですね。ですから一等、二等、三等という印があれば誰も、国際列車を想像しますよね。駅へ行きましたところ、明日から運転するってわけです。たまたまそこにアメリカの人がいまして、自分達はベイルートにあるアメリカン大学、これは今でもあるそうです。アメリカン大学の教授である。明日、動くのなら一緒に行こうと約束して別れた。翌日行きましたところが、もちろん彼らもいましたけれども、豪華な国際列車を期待したら、一、二、三等には違いありませんが、一両の気動車なんです。それが三つの部分に分かれていて、一等が八人ぐらい座れるかな、それから一両が二等、三等というふうに分かれているんです。私は一等を張り込んで、くだんのアメリカの先生たちとしゃべりながら行ったのですが、そういう思い出なんか、あまり経済史には関係のない脱線ですが、その列車は脱線することなくベイルートへ着きました。

ベイルートでは、泊まっていたホテルが先日、砲弾で滅茶苦茶になっている姿を見て、ああこんなふうになってしまうのか、と思いましたが、たまたま私が最近までオフィスがあった西新宿のビルに、レバノン料理を出す店があります。そ



この店主と話していたら、日本人でベイルートへ行った人ってあまりいないもの
ですから親しくなって、自分はそのホテル、よく知ってるというわけです。ノル
マンディーホテルといったかな。

そこから今度はエジプトへ行きます。このエジプトへの飛行機がまた忘れられ
ない。というのは、飛行機に乗ったのはいいのですけれども、中に乗った旅客の
間で喧嘩が始まっちゃった。飛行機がもう大揺れになる。わざと揺らしたのかも
しれませんけれども、その度に、コーヒーがひっくり返ったり、とにかく大騒ぎ
で、エジプトへ着きました。カイロへ着いたのはいいのですけれども、予定が変
わったのでホテルを予約していない。泊まるホテルがないんですね。たまたま乗
ったタクシーの運転手が、自分が探してやるというわけで、私を助手席に乗せて
探してくれ、辛うじて今夜何時からなら空くという宿を見つけました。それまで
はお前、助手をやれと。私は生まれて初めてタクシーの助手をやって、ドアを開
けたり荷物を運んだりなんかしましたけれども。彼も英語を話しましたが、彼は
自分はグreekだと、ギリシャ人なんですね。中東にはいろんな宗教・民族の人
が一緒に住んでいるのです。キリスト教徒もいればユダヤ教徒もいる。もちろん
イスラムの人もいる。キリスト教といったっていろんな派があるわけです。彼ら
と一緒に、その当時はまだ仲良く住んでいたわけですね。夜はギリシャ人たちの
集るところで食事をして、彼は私を皆に紹介してくれました。

さてそこで大きな転機がくるのですね。翌日だったか翌々日だったか、観光バ
スを使いまして、誰もが行くギザのピラミッドを訪れます。行きますと旅行案内
人がつきまといってきます。私はそれを突き飛ばす勢いで、はねのけて、ピラミッ
ドによじ登った。これは皆さん、絶対にしないでください。今日では厳禁されて
います。これをやったら射殺されても仕方がないんです。ですが、私の時はまだ
禁止令は出ていなかった。ピラミッドは風化していますから、手足をかける穴が
いっぱい、登頂はそんなに難しくないんです。むしろ下るときの方が怖いです
ね。下が見えると、ぞーっとします。登りは、とにかく「上を向いて歩こう」じ
ゃないけど、空を向いて登っていけばいいわけですから、そんなに怖くはない。
てっぺんまで行きますと、後ろからは観光案内人が、アラブの服をひらひらさせ
ながら追っかけて来るじゃないですか。てっぺんまで行ったら、とうとう逃げ場
がなくなって、そこでしょうがない、幾らか払いました。てっぺんがどうなって

いるかという、かなり広い平らな部分がある。もうそこに先客がいましたが、そこに立って見渡す風景がすごいんですね。というのは、ピラミッドというのは丁度片方がナイル河の緑野、他方はサハラ砂漠。その接点の境目に、ずーっと地平線に向かっていくつも並んでいる。あの風景だけは忘れられませんが、そこで、悟りを開いたっていうと、大袈裟になりますけれども、色々考えました。というのは、ピラミッドというのは紀元前何千年に造られていますね。あの時代にこれを造り出す社会的・工学的エネルギー、しかも王様のお墓という実用的には何の意味もない、現在は観光資源になっているかもしれないけれども、その当時は何の意味もないものを造り上げるエネルギーは一体どこからくるのか。しかも、てっぺんからみる現在のエジプトの人達の家というのは、やはり貧しいわけですね。何故なんだろう、ということを考えました。そうするとどうも私達が習ってきた、みなさんはそうでないかもしれないけれども、少なくとも私が習ってきた歴史の展開、古代奴隷制、中世の農奴制、近代資本主義、それから社会主義という一本の線の上をずーっと走っていくという考え方が根底から崩れてしまったのですね。歴史は決して一本の線の上をどの民族も同じように進むものではないのではないのか、ということがひらめいたんですね。少なくともこの古代の、この巨大建造物を造った歴史、それは、それまでのシリアやレバノンでも一部は見ているわけですが、その力は、それはもうそこで完結してしまっただけではないか、と。中世から始まってくると、系列が違うんじゃないだろうか。だから単線的な歴史の見方ではなくて、歴史というのはもっと複線的にみないといけない。あるいは、多元、多系列的にみないといけないんじゃないかと。ということ考えたのですね。

これで私の「一般経済史」の枠組みの方向付けはできたわけです。帰国してからの話ですけれども、それからあと、私の「一般経済史」は、それをいかに具体化するか、ということになります。そうすると、「一般経済史」は、楽しい講義に変わります。それまでの苦しい講義から。ですから、ピラミッドへよじ登ったことは、意味のないことではなかったと今でも思っています。そのことは何かにも書きましたけれども、暇になったら少し詳しく一冊の本にしてみようというつもりであります。

そういうわけで、この私の海外留学というのは、目的地に着く前から、とにかく

く「一般経済史」の枠組み作りにとって非常に重要な経験をさせてくれましたし、寄り道してよかったと思っています。その留学であります、結局リスボンへ参りましたけれども、何しろさあどうぞと古文書館で通されて古文書を見ても、これには全然歯が立ちません。何しろ手で書いたものであり、しかも、16世紀、17世紀の古文書。ポルトガル語ありスペイン語ありイタリー語ありラテン語あり、ですね。私の習った、というか勉強してきたのはポルトガル語4週間ぐらいですから、そんなもの、役に立つわけがないですね。ポルトガル語は習っていましたが、はっきり言ってギブアップしました。日本とポルトガルの関係については、その後間もなく文学部の高瀬弘一郎さんが行かれ、立派な業績を出されました。

私は、リスボンで書店に通い、面白そうな本を探しました。そして見つけたのが、ベルギーの経済史の先生で、日本には全く紹介されていないフェルリンデンという人の書いた「一般経済史序説」です。フランス語です。彼がポルトガルの大学、一番有名なのがコインブラ大学で講義をした時の、学部、学生向けの本です。それを手にして読み出すと、それが、今の申しました私の考え方にそっくりなんです。経済史、人間の経済史には第一のサイクルと第二のサイクルがあって、第一と第二は必ずしも繋がってはいないんだという意味のことを書いているんですね。

そこで、私はポルトガルがダメなら、フェルリンデン教授のところ勉強したい、と思うに至りました。その方はベルギーの、英語読みではアントワープ、フランス語読みではガン、現地のフラダース語読みではヘントですけれども、一以下アントワープと英語読みにします。アントワープ大学の教授であります。私の最も尊敬する歴史家で「マホメットとシャルルマニュ」で有名なアンリ・ピレンヌもその大学の教授でした。だからそこへ留学先を移す必要が出てきました。

私は、留学前にポルトガル語を、ポルトガルの外交官から習っていたのですが、ヨーロッパの外交官は、当時、あまりすることがない。ですからしょっちゅうパーティーをやっていて、お前も来いと誘われ、そこでいろんな国の二等書記官クラスの人と親しくなりましたが、特にベルギーの二等書記官のフェルコーテレンという人と親しくなりました。その人に手紙を書いて、アントワープ大学で勉強したいといったら、たまたま彼もアントワープ大学の出身だったこともあって、多少、奨学金

をとってくれたんですね。それで留学期間を延ばすことができまして、リスボンからアントワープへ移るわけです。

ところがアントワープへ行ったら、なんとフェルリンデン教授はその年、サバティカルでいないじゃないですか。今だったら、インターネットでそういうことをちゃんと調べて行くのでしょけれども、当時、そういうことをやれないので、リスボンとアントワープで二つ空ぶりをしたわけです。もう一つで三振です。帰って塾に何と報告しようか困りました。ところがそのフェルリンデン教授に会えなかったことが、今度は私に幸運をもたらします。それはフェルリンデンの代わりに経済史を教えに来ていたのが、クレベックスという、ブラッセル自由大学、自由大学というのは要するに宗教から独立した大学ということです。ブラッセル自由大学のクレベックス教授が代講していたのです。私はこの人と親しくなります。年齢も大体同じくらいだったのです。家にも招いてくれました。ある日、その人が、この頃、ヨーロッパで非常に有名になっているのがこの本だと言って私に渡してくれたのが、歴史人口学の本で、この本との邂逅が私の学問を決定的に変えることになりました。それは、フランスのルイ・アンリという人の書いた2冊の本。1冊は手ほどき、1冊は実際に分析したフランスのノルマンディー地方のある教区の歴史人口学研究です。それを辞書を片手にぼちぼち読んでいくうちに、あっこれは大変なものだということに気がつきます。つまり、それまで人口の歴史の研究というと、極端に言えば、人口が何年に何人ぐらいあったという程度で済んでいたのですが、彼のやり方というのは、人口学の手法を、今まで誰も組織的に使わなかった資料に適用するというもので、だからこそヒストリカル・デモグラフィと呼んでいる。私は早速、その本を読んで、その方法を日本へ持ち帰って、日本の史料に適用してみようと決意しました。

このヨーロッパで歴史人口学に使われた資料は、教会の資料、教区簿冊（ぼさつ）といいますけれども、それには各教会の牧師が教区民の洗礼、埋葬、結婚を、年代記ふうにして書いてあるのです。何月何日誰と誰との間に子どもが生まれた。何月何日誰が死んだ。何月何日誰と誰が結婚したということを、ズーっと書いてある。これを出生、死亡、結婚に読み替えると、人生最大の出来事—人口学の基礎になる—が個人単位で明らかになります。つまり人生の始まりと終り。それから真ん中にある結婚。これが記録されているわけです。それを丹念に繰ってつなげ

ていく。ある人が生まれた。それがその教区にいれば、何十年後に誰それと結婚して、何年に子どもを産んだ。その子どもはどうなったか。また何年か経つと2番目の子どもが生まれる。そういう作業を家族復元といいますけれども、これをやったわけですね。名も無いという用語がありますが、庶民の日常行動の記録を統計的に処理する画期的な方法なのです。この家族復元が、ヨーロッパの歴史人口学のいわば、中心的な作業でして、それを私が日本で実行しようとしたわけでもあります。

とにかく、ヨーロッパで歴史人口学と出会い、それから一所懸命勉強して、それまでは、実を言うと真面目に勉強していなかったのですけれども、丁度東京オリンピックの直前あたりに、日本に帰ってきました。そしてスタートするのですが、初めはわからなかったのですけれども、この歴史人口学というのは大変お金の要る学問なのです。史料集め、整理に人力と時間がかかる。史料といっても大量の史料でないと有意な結果は出ない。ですから私は、自分の持っていた蔵書を全部売っ払いました。幸い、その時大学の設置ブームですが、どの大学も本をたくさん集めなければいけない。それで古本が高く売れたのですね。自分の思ったより、倍ぐらいの値段で本が売れました。今は、逆に自分の本を売ったら、予想の三分の一にもなりません。とにかくそうやって研究費を作って、史料収集から始めました。それ以降、私の関心というのは、もちろん経済学部にありますから、経済史を離れることはできないけれども、人口の歴史、あるいは歴史人口学に移っていくわけです。

そういう分野で最も先進的であったのは、実はフランスです。歴史人口学もフランスで生まれましたけれども、フランスにアナル学派というのがあります。季刊誌の「アナル」に拠る人たちです。私は、最初の研究結果を1968年にアメリカで開かれた国際経済史学会で報告します。生まれて初めての国際学会での報告で、あがってしまって手は震えるは、読んでるペーパーから目を離すとどこを読んでるのかわからなくなるは、というわけで、ほんとにペーパーから目を離せなかった事を思い出します。質問も何とか答えまして、そのセッションが終わると紳士がやってきて、今の報告、非常に面白かった。是非、自分の雑誌に寄稿してくれっていうんですね、論文として。私はちょっと夢のような気持ちになりました。ビギナーズ・ラックというか、自分が初めて国際学会で報告をしたもの



が、外国の方の目に留まって、それが雑誌に載るなんていうのは、やっぱり夢ですよね。これは。しかもそのやってきた人は、ル・ロワ・ラデュリというフランスの有名なアナル派の歴史家として、当時アナルの編集長だったのです。その後、氏とは非常に親しくなりますが、アナルに論文が載るということは、ヨーロッパで学者として認められたということになります。そのアナル学派の活動は、ル・ロワ・ラデュリが編集長であった時代が絶頂期でした。

次の年には、英国のケンブリッジに出来た「人口と家族の歴史に関する研究グループ」に招待され、ここでも報告する機会を持ちました。それ以来、多くの国外の研究者に知り合いもできてきたわけであります。私の仕事は当初、日本国内では全然相手にされない。歴史人口学そのものが日本でまだ認知されていない分野だったのです。現在では多くの方がこの分野で研究するようになり、研究会も出来ました。私はむしろ、ローテク人間でありまして、若いハイテクを駆使する方々の後塵を拝している始末ですが、むしろこれは、大変喜ばしいことであると思っています。学問の発達を意味しますから。この歴史人口学については、「日本経済史」や「一般経済史」で方法や成果を紹介しました。

2番目のタームの勤勉革命ですが、歴史人口学と関係があります。何かというと、その歴史人口学の本をまとめていく最中で発見したのですけれども、史料に人口ばかりでなく、家畜の数が書いてあります。各村に牛や馬が何匹いるというように。その家畜の数が、江戸時代の中頃から減っていくのです。けれども人口は減ることはない。増えなかったとしても減ることはない。生産量も減ることもない、生活水準も低下はしていない。ということになると、従来、家畜のやっていた作業を人間がやったとしか考えられないわけですね。技術的な発達もあったかもしれませんが、つまり人間がよく働き、勤勉になったのではないかと考えました。あるいは、労働が強化されたという表現をする人もいますけれども、私は勤勉になったといった方がいいと思います。つまり、働くということに一つの道徳性が与えられる。これは江戸時代の著作、農業書にも出てくることなんですけれども、働きなさい、その分、報いは必ずきますという意味のことが書いてある。

それを私はヨーロッパの産業革命、インダストリアル・レボリューションに対して、インダストリアス・レボリューション（勤勉革命）と名づけました。このインダストリアス・レボリューションという用語は、最近海外でも使われるよう

になります。アメリカやイギリスの経済史学者達がその言葉を使って説明をする。多少、私の使い方とニュアンスは違うところもあるのですが、とにかくインダストリアス・レボリューションという、ある用語を作り出すことが出来、それが、国際的に使われるようになるというのは、やっぱりこれは嬉しいことでもあります。なんか自慢話ばかりのようなことになりますけれども、一つ、そういうことをお話ししておきたいと思います。

最後の経済社会は、経済的価値が優位になった社会のことです。人間は多元的価値観の持主で、最高位に宗教的価値をおく時代もあったし、政治的価値の場合もありました。そのなかで、現在経済的価値がわれわれの社会では最高位に置かれています。同じものを異なった価格で売っていれば、消費者が一番安いところで買うでしょうし、生産者は、一番高く買ってくれる相手に売るでしょう。市場経済の根底にあるのはこのことです。その上に経済的諸法則が出来てくるし、それが何かを探ることが経済学の出発点になります。ですから、市場経済や資本主義経済は、この経済社会を前提として成り立っているのです。この概念を使うと「一般経済史」の説明が容易になります。

そういうわけで「一般経済史」や「日本経済史」は初めは苦しかったけれども、枠組みができてくると、段々楽しいものになっていって、内容的にいても、これは自己満足の程度ですけれども、まあCから始まってB、BからAというふうになっていったと思います。ですから、皆さんがどの年、時代に私の講義を聞いたかによって、あの頃の先生はこうだったなと評価が違ってくるのではないかと思います。

ゼミ、研究会であります。そこに書いておきましたように、研究会は、唯一、私がやってよかったと思うことは、十週レポートというものを課したということです。私は、来る者は拒まず、去る者は追わずという主義で、入ゼミ試験というものをやらない。初めの頃はやっていたかもしれないけれども、1回の試験でお前ダメという勇気は到底ない。希望者は全員入れて、そのかわり、初めの十週、つまり夏休みまでは定めた著書について毎週レポートを出してください。1回でも途絶えたらチョン、という方式でやったんですね。そうしますと、読む方はつらいんですけども、9月になると適正規模になるわけです。ですから、私のゼミの出身者で今日来ていらっしゃる方々は、十週レポートの試練をくぐってら



た方ということになります。ところが、そこから先はいけないので、それでエネルギーが尽き果てたわけでもないんですが、夏合宿なんかに行くと、本来夏合宿ってというのは、勉強するために行くわけですね。けれどももう、昼の勉強が過ぎると夜の某室内競技のことが気になる。あんまり勉強の方に身に入らないのは、学生諸君じゃなくて先生の方なんですね。勉強は普段やっているんだからいいんだなんて理屈つけて、夜の競技に力を入れて、まあ勉強したい人は大学院の、幸い真面目な人達が何人もいましたから、そちらにお任せして、私は某室内競技の方でゲマインシャフトでもありゲゼルシャフトでもある、ある室内競技を楽しんだわけでありまして。でもおかげでゼミ生との間は、大変親しい関係ができました。今日もこの後、会があるのですけれども、何百人もの方が会員です。「逢瀬会」といいますが、百人一首の「瀬をハヤミ…」の句からゼミの卒業生が名付けました。あるときに国際会議を開きましたが、お金が集らないんですね。そのときにゼミ出身の方々がお金を集めて出してくださった。こういうことはあり得ないことなんだそうです、海外では。外国から来た人に言ったところが、そんなことは自分の国では考えられない、学生は自分達の敵だとさえ言う。

で、まあ、私はゼミをいささかゲマインシャフト的にやりすぎましたので、そのこと自身、これはいいことじゃなかったかもしれないけれども、結果的にはそういうことになったわけでありまして。ですから、私のゼミの自己評価をするとマイナスBぐらいかなというふうに思います。何しろ、30年間に亘り、25期までであるのかな、初めの頃のゼミ生は私と10歳ぐらいしか違わないけれども、終りの方にくると、自分の子どもよりまだ幼い。やっぱり、おかしなもので、自分の子どもより若い学生になりますと、年齢の差を非常に強く感ずるわけですね。また時代全体として、新人類とか新新人類とかという言葉が出てまいりまして、ものの考え方や行動に随分変化もでてきたわけでありまして。

最後になってしまいました。試験問題。「歴史」の科目、これは、たまたま担当者が海外に出ていたので私がもった年のことですが、私の50年間に渡る教師生活の中で、試験問題の中で傑作を挙げろといえ、その時の問題、「1590 何年、フェリペ二世、これはスペインの王様ですね。エリザベス一世、イギリスの王様ですね。それから豊臣秀吉の三人が、リスボンでサミット会議を開いたと仮定する。そこでアジアとヨーロッパの貿易・布教が主要議題となった。諸君はそこに

派遣された記者として報道を書け」、という問題をだしました。そしてまた回答の中での最高傑作は、秀吉は言葉がわからないので終始黙っていたと。これは一本とられました。

先ほどちょっとフランスのアナール派のことになりましたけれども、「日本経済史」の試験もそういう性質の問題を出します。ある、このゼミの学生に、姓は略しますけれども、名前が義平（ぎへい）という男がいて、これがなかなか、テンションの高い学生で、愉快的な奴なんですね。試験問題が「義平の生涯を書け」、ただし、義平は何年にどこで生まれ何歳まで生きたと仮定するという問題をだしました。こういう問題を出しますと、答案が読む者を楽しませてくれる。試験の答案をみるというのは、これは苦しいものです。特に似たようなことを書いた答案がどっさりくると、もう教師稼業を呪いたくなる。なんか脳みそが海綿になったような感じになるんですけれども、こういうフェリペ二世がどうか、あるいは義平がどうかという時の答案は、色々な答案がきまして、読んでの方が楽しくなっちゃうんですね。義平の一生というのも、私の「日本経済史」で出した問題の中で傑作の一つであり、フランス・アナール派が私に近いのか、私がアナール派に近いのか知りませんが、アナール派の「パリの商人がストラスブルクへ商用でかけた。その旅行記を書け」、これはフランスの問題ですから、同じような立場からの問題ですね。つまり人々の日常性を知るといって、朝起きたら、起きてから夜寝るまでの一日、それから一年、あるいは一生というものが、この目の前にずーっと広がるような、そういうことがちゃんと頭に入った上で、それを整理するなり理論化するならしなさい、これが私のもっている学問の方向であり、少なくともピラミッドへ登ってからあと、そういうことを念頭においた講義をし、研究をしてきたつもりであります。振り返ってみますと、こういった考え方は、私が最初に勤めた常民文化研究所で学んだことでもあります。人間は、生物として、生まれて最初に出会ったウイルスを覚えているといわれます。知的な面でもそうだったのかも知れません。

終りになりますが、私、この慶應義塾大学で36年間、教員としてご厄介になったわけがあります。この間、同僚、学生、そして職員の方々に大変ご迷惑をかけ、色々ご心配も賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げ、今日の一番苦しく、かつ楽しかった講義の結びとしたいと思います。どうも有難うございました。